

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25381281

研究課題名(和文) 特別活動によるいじめ未然防止プログラムの開発研究 - 学級活動で育む人間関係の構築 -

研究課題名(英文) A Study on the Development of Bullying Prevention Programs in Extraclass Activities -Construction of human relationships fostered through class activities-

研究代表者

松岡 敬興 (MATSUOKA, YOSHIKI)

山口大学・教育学部・准教授

研究者番号：10510539

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、いじめの未然防止を図るために、児童生徒に「自己理解」、「他者理解」を促す取組が効果的であると考え、教育実践として「友だちの顔を描いてみよう」を開発した。

自尊感情が低く自己肯定感に課題を抱える児童生徒が実践活動に取り組み、全ての生徒が参画できた。児童生徒一人一人が発表することで、各々に自信がもたらされ自己達成感を高めた。また生徒が互いに自己理解・他者理解を深めることで、仮に課題が生じたとしても、相手のよさを知り得ていれば、自ずと解決の方途を見出せる。いじめを未然に防止するうえで、互いに理解し合う取組を計画的・継続的に行うことで、新たな人間関係の再構築に向けた教育効果を見い出せた。

研究成果の概要(英文)：This research developed the “Let’s Draw a Friend’s Face” teaching tool in order to prevent bullying by encouraging young pupils to understand themselves and others, which it considers effective.

By engaging in the activity, pupils with low self-esteem who grappled with self-affirmation issues were now able to take part in activities together with everyone in the same grade. Each pupil was able to present his or her work, thus gain confidence and, it is believed, enhance his or her sense of achievement. By coming to an understanding of themselves and each other, pupils got to know the other’s good points and work their own way towards finding a solution in the case of a problem arising. In preventing bullying, the activity was able to bring about mutual understanding in a systematic and ongoing way, the educational effect being a tendency to create and reshape relations with others.

研究分野：教育学

キーワード：特別活動 学級活動 いじめ問題 人間関係

1. 研究開始当初の背景

いじめ問題の解決に向けた具体的な取組を提示することが、学校現場における喫緊の課題である。学級担任が、児童生徒と向き合い観察のもとで指導にあたる際に、その可能性と限界を踏まえながら展開する必要がある。そこでいじめの芽は学級に潜んでいるとの認識のもとで、学級経営に取り組むことが求められる。一見すると、学級担任の目には問題性が見い出せないとしても、目の行き届かない場面でいじめが行われているとの認識を、指導者として肝に命じなければならない。

陰惨ないじめの横行により、それに苦しむ児童生徒が、誰にも打ち明けられずに、相談することもなく自死に至る場合もあり、指導者として危機意識を抱きつつ、いじめ問題を未然に防ぐ取組を積極的に実践することが求められている。つまり未然予防の考え方により、学級における児童生徒の人間関係をより望ましいものにすることが、一つの効果的な介入である。またアンケート調査等による聞き取りや指導者と児童生徒との教育相談など、個別の対応と連動させることも肝要である。

そこで学級担任が、日常において活用できる、いじめ問題を未然に防止することを目的とする「いじめ未然予防プログラム」を開発し、その教育効果について実証する。

ところで本研究は、研究対象校から持ちかけられた相談に始まる。自尊感情が低く人間関係に課題を抱える生徒の実情を踏まえ、その改善を図るための教育実践を要請された。そこで全ての生徒が参画でき、その成果を共有できる教育実践の開発に取り組んだ。

2. 研究の目的

本実践活動を通して、生徒が互いに「自分自身のよさ」、「なかまのよさ」に着目しつつ、語り合い、なかま同士で共有することで、既存の人間関係をゆさぶりその再構築を図る。また既存の情報はもとより、新たな気づきをもたらすことをめざし、自己理解・他者理解を深め、望ましい人間関係の構築を図る。

3. 研究の方法

(1) 方法

開発したいじめ未然防止プログラムを A 県 B 市の公立中学校において、第 2 学年 (2 学級) を対象に、2016 年 3 月に行った。筆者が指導者 (T1) を担当し、学級担任に指導者 (T2) を依頼した。なお本研究分担者が、取組の事前説明の際に、美術科の専門的見地から制作に関わる助言を担当した。

(2) 内容

生徒どうし (二人一組) で対話をしながら、相手の「顔」を描く活動を通して、「自己理解」、「他者理解」を深める。また制作作品を提示しながら、双方のよさについて発表し、

なかまのよさを共有し合う。

制作活動を手だてとして位置づけ、相手のことをより知ろうとする活動であることから、望ましい人間関係の構築へと繋げることをめざす。

以下、表 1 に授業実践の概要を示す。

表 1 「いじめ未然防止プログラム」の概要

	は教師による支援 は生徒の活動
< 1 限目 >	
制作活動 (40 分)	
活動内容について説明する [10 分]	
・二人一組で、お互いの顔を描く	
・気づきに着目し、自由に会話をしながら描く。同時にメモを残す	
・制作後、作品を示しつつ、互いに紹介し合う	
・相手の「よさ」を見つけて欲しい	
二人一組になる	
事前にペアを組んでおく。	
学級担任が編成する	
画用紙、クリップボード、鉛筆、を配布する	
制作活動に取り組む [30 分]	
< 2 限目 >	
鑑賞活動 (35 分)	
活動内容について説明する	
・互いに作品を用いて、学級のなかまに向けて発表する	
・作品を OHC で映写する	
二人一組で、互いに作品について発表する	
・一人一分程度の持ち時間とする	
・絵と関連させて、それぞれの「よさ」について、新たな気づきを含めて発表する	
ふりかえり (15 分)	
・本取組に関する意見・感想 (自由記述)	
・アンケート	

(3) 活動内容の実際

生徒一人一人が、活動の主役になれる場面や時間は限られている。学級活動で行う本取組は、一斉に全ての生徒が活動の中心に位置でき、能動的に取り組める所に特長がある。プログラムにおいて「顔」を描く活動場面では、相手をしっかりと見て、新たな気づきを相互間で伝え合いながら進める。するとこれまで気づき得てなかった事柄についても、本活動を通してより多くの新たな発見へと繋がる。

制作活動に入る前に、丁寧なガイダンスを行った。制作活動について、取組の方途、留意点、語らいの際の約束事、などを確認しつつ、生徒一人一人への目的意識を高めることに努めた。また次の時間に、制作物を用いて発表することを知らせることで、実践意欲を高めることにした。確かに発表の場面を設け

ることで心理的な負荷は増すが、全員で取り組むことから、むしろ各々の個性を生かした発表を見ることができた。すでに心理的な距離が近い生徒どうしでは了解されている情報であったとしても、他のなかまにとっては新鮮な情報にあたることは間違いない。これらを知り得るには、敢えてこうした機会を設けることが不可欠である。なかまのことを「知る」活動を通して、情報に厚みが増すとともに、人間関係の再構築が自ずと進み始める。

ここで制作活動における生徒の様子について、学級担任が課題の克服を期待する生徒Dに着目する。スケッチに際して、生徒Eと生徒Fの三名でペアを構成して取り組んだ。そもそも生徒Dが作業に取り掛かれるのかを心配したが、にぎやかに語らいながら、なかまの顔を描きパステルで色まで付けていた。その一方で、新品の鉛筆を極端に短くなるまで削るような行動も見られたが、作品を提示し学級のなかまに対して、友人のよさを取りあげて発表することができた。またその時、同じグループの生徒Eと生徒Fは、生徒Dの発言を斟酌し対応できていた。

何よりも当該ペアに限らず、発表をしっかりと聞き合い、時には質問をかわしながら、穏やかな雰囲気のもとで情報を共有できたことで教育効果を高めることができた。指導者が、学級での望ましい人間関係の構築をめざし、多様な工夫を講じる過程において、本取組もその一翼を担うことができたと思う。

(4) アンケート結果が示す教育効果

全ての生徒が制作に取り組み、ペアどうし自由で語り合い、最後に、前方のステージに立って、新たな気づきについての学級のなかまに対して発表することができた。その時、一時的には作品に注目が集まるものの、生徒は互いに知り得ていない情報を知り共有することができた。

授業プログラムの最後にアンケート(5段階)を実施した。結果を見てみると、二学級の平均値として、「新たに仲間の考えを知り得た」が4.2、「相手について自らの考えを持てた」が4.3、「楽しく取り組めた」が4.5、「自信のある態度で参加できた」が3.8、「心を開いて接した」が4.3、「仲間の目を見て会話ができた」が3.9、「仲間の話を真剣に聞いた」が4.3であった。

また、自由記述の内容からは、生徒が自発的に制作に取り組み、相手との会話を通して、新たな気づきに感動し、その一方で充実感の心地よさが読み取れた。

4. 研究成果

(1) 新たな気づきをもたらされる制作活動

本プログラムのねらいは、生徒どうし語り合いながら新たな気づきを見い出すとともに、それを発表することで、学級の仲間と共有することにある。プログラムに制作活動

を組み入れることで、語り合いがスムーズに展開できる。相手をよく見て描く活動は、相手のことをよく知るうえで、潤滑油としての役割を担う。語り合いが活発になるほど、新たな気づきを促し、より多くの情報を共有できることに繋がる。

授業実践において、生徒が取り組む様子を観察したが、それぞれ意欲的に参加し、会話がはずみ、画用紙の余白には多くのメモが残されていた。日常の場面において、改めて仲間のよさについて聴き出すことは皆無に等しく、仮に聞き取りの実践をしたとしても、快活に情報交換できることは予想し難い。「顔」を描くという作業を組み入れることで、より語り合いが深まったと考える。このことは、振り返りシートに記述された内容から読み取ることができる。

(2) なかま同士で情報を共有する意義

長沼(2005)は、「集団の中では、他者を知ることによって自己理解を深めることができる」と述べ、同時に所属感が得られることを指摘する。そこで本プログラムのねらいである自己理解・他者理解を深めるために、「知る」ことに重点を置いて授業実践に取り組んだ。生徒は互いに、相手のよさを知り伝えてあげる、その一方で相手が知り得たことを伝え聞くことができた。語り合う場面では、両者が同時進行で進むことから、理由を確かめ合うことも可能である。時折、自分が気づき得ていない内容を相手から指摘されると、新鮮である反面、その理由を朗らかな雰囲気のもとで確かめる場面も見受けられた。「知る」ことは、疑問を解決へと導くとともに、より自己理解を深めることに、重要な役割を果たすものとする。

また濱川(2016)は、特別活動を通したいじめのない学級づくりにあたり、「自他理解の深化」を取りあげ、学級活動における人間関係を深める場面や指導の工夫が重要であると述べている。いじめに関わる取組は、未然に行うからこそ意味をもつ。学級が集団によって形成されている以上、そこには人間関係が生じる。生徒一人一人は、それぞれ個性的な存在であることから、集団の中でどのように行動していくのか、グループを形成することで安心できる居場所を求める。もちろん群れるのが苦手な、一人の方が落ち着く生徒もいる。

ただグループに所属さえすれば安定した居場所とならないのが現実であり、生徒は心をすり減らしながら学校生活を送っている。薄氷を踏むような人間関係を少しでも安定させるために、相手を「知る」ことは効果的である。筆者は、知らないがゆえに不信感や誤解を招いていると捉え、敢えて学級活動の場で、今よりも半歩なりとも、互いのことをより深く知り合えるプログラムを展開することにより、自他理解が進展することを期待する。本プログラムについても、系統的・計画

的に授業実践することで、人間関係の再構築をもたらし、引いてはいじめの未然防止に繋がるものとする。

(3) 自己理解・他者理解を深めるかかわり

本プログラムは、自己理解・他者理解を深めることをねらいに掲げた取組であり、生徒一人一人がおおむね相手から新たな気づきを獲得できたと判断できる自由記述が見られた。「友だちが僕のことを思っているのが分かった」、「しゃべったことのない子たちのこともたくさん知れてよかった」、「こんなにじっくりと二人で話したことが無かったから、色んなことが分かりました」、「ペアのいい所をさらに見つけることができた」などは、相手に関する新たな気づきを得ることができたことを表現している。

中でも「話すことで少しだけ相手のことを知ることができた」、「人からどう思われているのか少し分かった気がする」、「みんなの考えていることが少し分かった気がする」などに見られる「少し」の表現を大切にしたい。プログラムの授業実践を通しての教育効果は、生徒一人一人の特性に依拠するところが大きく、少なくとも生徒が前向きに取り組むことが前提条件である。「少し」の表現を用いたのは、取組への期待の低さに反して、成果として他者理解がもたらされたのではないだろうか。言い換えると制作活動が、生徒間の語りを活性化させたことを裏付けている。

(4) まとめ

いじめ問題を解決するうえでは、未然予防が不可欠である。学級担任による生徒一人一人への観察、アンケート調査、教育相談など、多様な手だてを講じたとしても、完全に防ぐことは困難である。学級において生徒どうしが関係性を保ちながら、日々学校生活を送っていることへの危機意識を、学級担任が強く認識する必要がある。

もしもいじめが顕在化した段階にあれば、すでに手遅れであり、むしろ事後対応に追われることになる。昨今若手教員が増える中で、4月の冒頭から取り組める、いじめの未然防止に関わる具体的なプログラムへのニーズは高い。系統的・計画的な学級活動を展開することで、いじめの未然防止がもたらされる。一見すると、教育効果が分かりづらいが、危機的な状況に陥らないでいる状況こそが、いじめ未然防止に関わる取組の教育効果であると評価できる。

生徒一人一人に学級での居場所を保障する取組を展開することが、いじめの未然防止に繋がる。つまり望ましい人間関係の構築をめざした取組を展開することで、生徒間での関係性が再構築される。その時信頼を高めるうえで、相手に関わる情報量が大きく影響する。人は相手のことを知らないがゆえに、疑い、不安になり、当たり障りのない線でバラ

ンスを保とうとすることがある。相手の本当の所を知りたいがゆえに、衝突さえ起こり得る。互いに知り合い、情報を共有することが、誤解を招くことを予防する。

本研究では、いじめ未然防止プログラムを開発し、互いに知ることで得た情報を共有し合うことで、一定の教育成果をあげることができた。生徒の自由記述、アンケート調査結果より、自己理解・他者理解を深めることに繋げることができたのは、制作活動という語り合い易い環境のもとで進めたことによる。生徒一人一人に自己開示を促すうえで、相手のことをよく見る、それを表現する作業を通して、より相手のことをよく知ることへの意欲を掻き立てたと考える。

いじめの芽はどの学級においても存在することから、学級担任の日々の危機意識に基づく取組が、いじめの未然予防を大きく左右する。今回開発したプログラムはその一例に過ぎないが、さらに系統性を踏まえたプログラムの開発が必要である。中学校3年間の流れ、4月から翌年3月までの流れを踏まえ、発達の段階を考慮した取組を継続して展開することが、いじめの未然防止に繋がる。学級担任が、生徒一人一人に居場所を保障し、多様な関わりを通して自己実現が図れる学級づくりに努めることが求められる。そのことが引いては、いじめの未然防止の実現に直結するものとする。

<参考文献>

長沼 豊・柴崎 直人・林 幸克、久美株式会社、特別活動概論、2005、5

中園 大三元・松田 修・安田 陽子・濱川 昌人、学術研究出版、特別活動の理論と実践、157-158

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

松岡 敬興、蛭谷 昌之、特別活動におけるいじめ未然防止プログラムの開発研究 - 学級活動で育む人間関係の構築 -、山口大学教育学部研究論叢、査読無、第66巻第3部、2016、pp.269-280

[学会発表](計2件)

松岡 敬興、望ましい人間関係を育むいじめの未然防止に関する研究 - 自己理解・他者理解を深める学級活動を通して -、日本生徒指導学会、平成28年10月30日、文教大学湘南学舎(神奈川県・茅ヶ崎市)

松岡 敬興、特別活動におけるいじめ未然防止プログラムの開発研究 - 学級活動で育む人間関係の構築 -、日本特別活動学会、平成28年8月28日、東京学芸大学(東京都・小金井市)

〔図書〕(計1件)

松岡 敬興、伊藤 潔志、上村 崇、奥田 秀
巳、川本 太郎、相馬 伸一、松永 幸子、
松田 智子、友野 清文、杉山 直子、渡部 明、
歌川 光一、竹中 烈、有馬 知江美、田中 直
美、濱元 伸彦、中川 雅道、北村 陽、西
脇 雅彦、杉浦 英樹、保育出版社、哲学す
る教育原理、2017、188 (174-178)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松岡 敬興 (MATSUOKA, YOSHIKI)
山口大学・教育学部・准教授
研究者番号： 10510539

(2) 研究分担者

蜂谷 昌之 (HACHIYA, MASAYUKI)
広島大学・教育学研究科・准教授
研究者番号： 60510542